仙台教区報

発行　カトリック仙台司教
980 仙台市本町一丁目2番12号
電話〇二二―222―七三七一番
編集・発行人　笹気直哉

第一回福音宣教推進全国会議

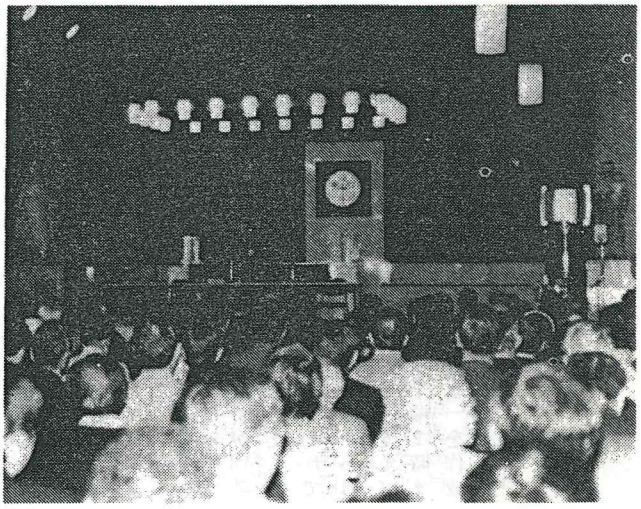
第一回福音宣教推進全国会議（ナイス1）が、十一月二十日（金）から二十三日（月）まで、京都・カトリック河原町教会において開催された。

全国十六教区から二七六名の信徒・司教・修道者・司祭が、「開かれた教会づくり」のテーマのもとに一堂に会した。

この日まで三年の歳月をかけて、各教区、各小教区からの様々な意見を収拾し、それを練り上げて各教区代表者たちが持ちよってきた。

日本の司教団に対して、カトリック教会の新しい第一歩を踏み出すために、共に祈り、共に考え、共に取り組んでいく答申を生み出す集いが始まった。

司教団への答申という性格を基本的に持つこの全国会議は、ややもすると抽象的な論議に終始してしまう恐れが一方で懸念されていた。しかし、会議の実際の中身は、そして特に「分団会」においてはその懸念をほとんど一掃するものであった。



各分団会（これは、グループによって主題を分けて討議する「分科会」と異なり、同一主題を同時に討議するもの）は、各教区の発題を受けて、持ちよってきた教区の意見を活発に出し合った。

こうした中で、特に際立った意見は、今困っている人に対して具体的に対応できる組織を強化すること、カトリック広報の充実・強化、日本の生活・習慣に即応できる典礼や教会用語の見直し、青少年や女性の役割の重視等が上げられる。

全国会議で答申されたものは、十二月の司教会議で検討される。

結果が待ち遠しいもの。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊ 開かれた教会づくり ＊

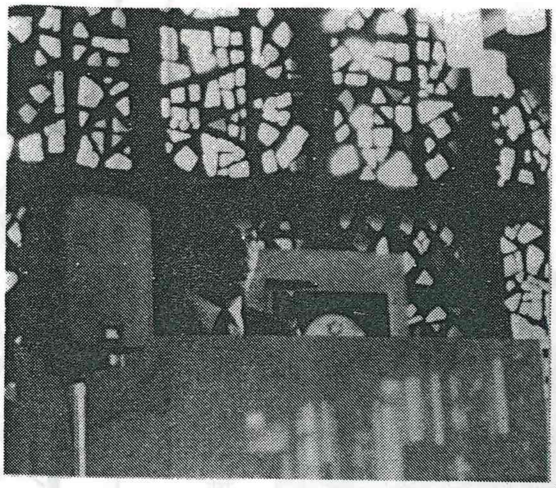
第一回福音宣教推進全国会議

＊　仙台教区広報担当　笹気直哉　＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

十一月二十日（金）18時、開会式が行われオリエンテーションの後、19時から早速の全体会議。実行委員長・相馬司教の趣旨説明の後、4教区から各二十分の基調考察（信仰と生活、社会と教会について）があり、最後は岡田武夫師（東京教区・実行委員）の「共通理解を求めて」まとめとした。

（尚、この岡田師のまとめは、教区代表者全員が所有しておりますので、各地の報告会の中で代表者からお聞きください。）



二十一日（土）9時、全体会。4教区各十分の発題。テーマは、柱1の社会とともに歩む教会。この中で、仙台教区代表佐藤正久氏（仙台・ドミニコ学院教師）の発題がなされた。その要旨は、一、教区内に一つ、専門のカウンセラーが常駐し、いつでも相談にのってくれる「カウンセリングセンター」を設置する。二、広報機関の充実。三、諸宗教との協力。四、地域社会との積極的な交流。五、社会の非福音的な現状を福音的なものに改善していくために、具体的な対応をする。六、カトリックの教育及び医療、社会福祉施設等の組織的連帯の強化。七、一般の若者が魅力を感じる企画を考える。八、日本の文化を大切にする教会。九、教区財政の確立。

（尚、佐藤正久氏の発題全文は、別紙にて教区報とともに各小教区にお送りしておりますので、是非御一読下さい。）

10時分団会。（15の分団会）分団会は、十七、八名で構成され、共通の主題を同時に討議し、その内容を三つの提案にまとめて全体会で発表する。（各分団会で出された提案をまとめて司教団に「答申」する。）16時全体会。分団会報告と発題。テーマは柱2生活を通して育てられる信仰。19時分団会。

二十二日（日）9時分団会でスタートし、前日とほぼ同じスケジュールで全体会をもって終了。19時から懇親会。

二十三日（月）9時全体会議。全体の経過報告、答申案の発表と質疑応答。閉会式。

13時記念ミサ。解散。

司教団への「答申」について

最終日の全体会議において、各分団会からの提案を受けて、十五名の実行委員の手でまとめられた「答申案」が発表されました。

柱1に関する提案とその理由として、4つの提案と1つの特別提案。柱2に関する提案とその理由として、2つの提案。柱3に関する提案とその理由として、6つの提案。

その内容をここに掲載するはずでしたが、質疑応答の結果、提案内容やその言葉の指し示す意味などに関してまだ不十分であったため、答申の採択までに至りませんでした。

質疑応答は白熱を極め、十七、八名ほどの質疑のいずれもが「開かれた教会づくり」への熱意に燃えていました。

その結果、質疑の内容を充分に考慮し、また、合計13の上記の提案に各自が選択した優先したい提案の統計結果もふまえて、実行委員に最終案を委ねることになりました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

？？　京都会議異聞　？？

カトリック教会の中・長期展望のための全国会議と銘打ちながら、青年の代表者が14名とは？某青年曰く「オジサン達で決めたことをボク達がこれからやっていくの？」それではあんまりだ、このまま引下がってはいられない。なんとか青年としての意思表示をしようぜ！懇親会の後、10時過ぎから午前2時までかけて「教区青年代表」の「宣言」を作成した。（カトリック新聞12月6日号、3頁上段参照）青年はやる気満々!!

『何故、今、ブラジルか？』

首藤正義

人は、その人生の中で、様々な出会いをする。そして、その出会いによって、人は自分の歴史を記していくのである。従って、どんなつらい苦しい出会いであっても、その人の実人生と密接に結びついているものであるから、なかったことにすることは出来ない。

出会いは、その対象を人に限られるものではない。出来事の出会い、書物との出会いもある。

「私を変えた一冊の本」という表現は、そのことを物語っている。

今から一年半以上前のことであるが、仙台教区報に「ブラジルを訪ねて」という記事が載った。その中に、アマゾン流域のサンタレン教区のドン・リーノ司教の言葉があった。

「私達は、今、緊急な、しかも大きな問題に取り組んでくれる、勇気ある宣教者を必要としています。年老いた宣教者でも、時には七十の共同体を受け持ち、距離が遠く行きにくい所も多い。日本からどうか宣教者を送ってくださるように。」（仙台教区報第九十二号、一九八五年八月一日）

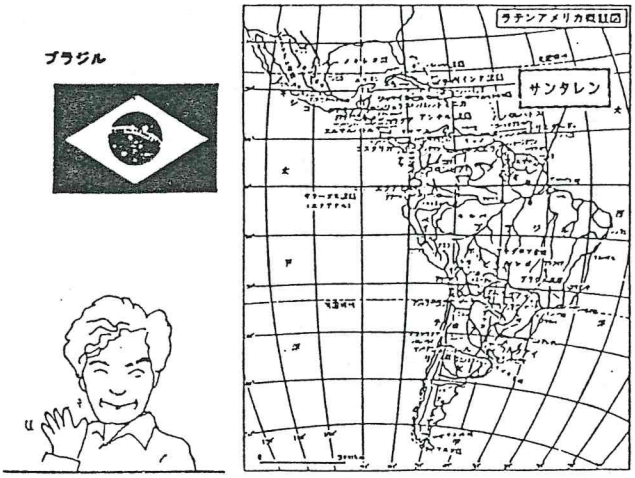
リーノ司教の言葉は、ブラジルのことを全く考えたことのなかった私に、強い関心を起こさせた。

「年老いた司祭が、一人で七十もの共同体のために働いている。」

年老いた司祭の心中、並びに、ブラジルの人々の状態を思うにつけ、ますますブラジルへの思いがつのり、これからの人生をブラジルにかけようと決心した。

それが、自分自身が福音を生きることとひとつになっていることも、心の中で確信している。

私の属する仙台教区も、年老いた司祭が教会で頑張っており、司祭の数も有り余っているという状態ではない時に、自らの事や必要をあとにして、隣の必要に応えるという判断をしてくれた、仙台教区の司祭の仲間に感謝している。



司祭評議会秋の定例会議

司祭評議会、秋の定例会議が十一月の第2月曜日（9日）に開催された。主な議題は、仙台教区の司祭大会について、および、教区内の司祭の協力体制について。

教区の司祭大会は、恒例として隔年に開かれており、来年がその年に当たっている。

大会開催については、教区司祭団・各宣教会・修道会とも、ナイス後の動きを司祭団から進んで押し進める意味で、また、研修と交流を深める意味でみな賛成。時期は、各県での教会・幼稚園関係の行事が一段落する六月末の27～29日、場所は仙台（禎祥苑）ということで一致した。

大会のテーマは「教区の将来を考える」とし、教区全体を見た宣教・司牧に当たるために地区を超えた司祭の協力体制を検討することが中心の一つとなる。司祭の協力体制に関する話し合いのなかでは、教区内の全司祭が「教区の司祭団」として教区のために働く意識をもっと持つ必要がある、という意見が提出された。具体的には、人事異動を各会での人事ではなく、直接司教の権限の下での人事とすることにより、司祭も信徒も能力を発揮して小教区・教区を活性化できるのではないか、という意見であった。

これについては、司祭の個人差もあり、また、教区と各会との契約にも深く関わるのですぐには実現できないが、今後大いに検討すべきことだということで合意された。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊シリーズ「知っておきたい　仙台教区」＊＊

教区司牧評議会

＊　教区全体の最も重要な会議　＊

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

教区司牧評議会は一年に二回、春分の日と秋分の日に開かれますが、この会議は、教区全体にとって最も重要な会議であると言えます。会議で、議題として取り上げられるべき問題から見ても、会議の委員（評議員）の構成から見てもそうです。

今年も去る九月二十三日に秋の定例会議が開かれましたが、「重要な会議なのに、教区の中であまり理解されていないから、司祭にも信徒にも、もっと知ってもらうようＰＲする必要がある」という強い意見が出ました。

そこで、これから教区報を通して、何回かのシリーズで司牧評についてお知らせすることに致します。

さて、司牧評議会（これから司牧評と略称します）とはどういうものかについて、九月二十三日の会議のときに佐藤司教様から解り易く説明がなされました。

「教会は、以前は司教・司祭の側で決めたことを、皆が実行するという形が一般的でした。しかし、第二バチカン公会議で、教会のヒエラルキアという面は否定されませんが同時に、教会の主たるメンバーは信徒であり、信徒がどう考え、どう行動するかを土台として教会を運営するために、信徒の意見を先ず聞くことが、すべてにおいて大事だという見方が打ち出されました。

ここに、司牧評の重要性がはっきりとよく出ています。

司牧評で討議されることは、教区の宣教・司牧全般の事柄を含み、『総会で取り扱う議題は、司教・司祭の側からも、信徒の側からも提案』として出されます。

その提案（議題）について、教区内の皆がどう考えるかを知るために代表者（評議員）が、代表してくる母体の皆の意見をまとめて持ち寄るというのが司牧評の総会です。

また、司牧評は単なる相談の場ではなく、「実際的結論を出す（司牧評規則第２条）」という目的を持っています。

決定機関か、諮問機関かという議論は、司牧評にはなじみません。仮に、司牧評で決定したとしても、小教区が受け止めなければ事は進みませんし、受け止めない小教区を教区から除外するということもありえません。

〝かくかくのことが必要だ、皆でやりましょう〟ということになれば、司教の名で〝こうしましょう〟と出して進めることができるのです。」

以下次号。

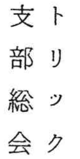
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

☆　事務所から冬季休業のお知らせ

昭和六十二年十二月二十九日（火）から昭和六十三年一月五日（火）まで、教区事務所は休業しております。

よいクリスマスとお正月をお迎え下さい。

日本カトリック医師会
仙台支部総会開催



支部長　早坂養吉

去る、昭和六十二年十一月十五日午後五時より、霊的助言者の佐藤千敬司教様、元寺小路教会主任司祭土井勝吾神父様をお迎えし、会員約二十名と医歯学学生数名と六名のカトリック看護協会の会員と共に、元寺小路教会の信徒館で昭和六十二年度総会を開催した。

議題は「現代の医療」ということで、特に問題になっている人工中絶・避妊・脳死と性教育の必要性について、パネルディスカッションの形式で活発な討論が行われた。

パネラーは、「性教育、特にカトリックとしての性教育は如何あるべきか」（早坂養吉氏）、「風疹などの妊婦が出産前に畸型児が生まれる可能性が強い場合のカトリック医師の立場」（前田敏行氏）、「糖尿病で妊娠した場合の出産」（星安治郎氏）の三名。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第一回福音宣教推進全国会議参加者および書記団の人数について

参加者：各教区代表二二四名（司教十七名、司祭七七名、修道者四六名、信徒八四名）、常任司教委員会推薦者二名、日本女子修道会総長管区長会推薦者二名、東京カトリック神学院院長一名、福岡サンスルピス大神学院院長一名、実行委員会委員九名、合計二七三名

書　記：分団会書記（京都教区、大阪教区青年有志）約一一〇名。

仙台領内キリシタン史 (5)

殉教

Sr 猪岡 庫

一六二二年の、いわゆる元和の大殉教（長崎）および、その翌年の江戸の大殉教の余波は、次第次第に仙台領にまで及んできた。江戸幕府は全国くまなく目付制度をはりめぐらし、当時の仙台領内の情勢も手にとるようにわかっていた。すなわち、カルヴァリオ神父が仙台領の布教の中心人物であること、また後藤寿庵が隠然たる勢力をもって、キリシタンを指導していることなどの情報を握っており、政宗はすでに禁教令を出していたにも拘らず、家光から直々にキリシタン壊滅の厳命を受け、カルヴァリオ神父については、名指しで捕縛を命じられたという。先に、仙台領内で活発な布教に従事したアンジェルス神父は、北海道まで宣教の足をのばしたが、江戸の大殉教ですでに壮烈な最後を遂げていた。

カルヴァリオ神父は、身の危険を感じて日本人に身をやつし、名前を長崎五郎衛門と称し、仙北の山麓下嵐江（おろしえ）に潜んでいたが、一六二四年二月に他のキリシタンと共に捕らえられた。棄教を迫られて拷問にかけられたが、屈しなかったので、仙台に送られ、ここにおいてかの有名な広瀬川の水責めによる殉教となった。二月二十二日、厳寒の広瀬河原における水籠責めの間、一同はゼズス・マリアの御名を唱えつつ、永遠の安息に入った。つき添った証人によれば、カルヴァリオ神父は、驚く程の忍耐をもって一同を励まし続け、次々に息を引き取ったのを見届けて、真夜中に漸く苦しみから開放された。水籠に入ってから、十時間後のことであったという。神父以下八名の尊い殉教であり、その名はいわゆる石母田文書に記載されている。殉教の場所は、現在殉教碑が立っている大橋の下流、琵琶首の河原であろうと言われる。処刑命令を出したのは政宗、執行したのは家老、茂庭周防であった。

政宗が殊の外心を痛めたのは、信任の厚い後藤寿庵であった。重臣石母田大膳に命じて背教の説得に努めたが効なく、ついに寿庵は追放されて南部藩に立ち去り、その後の消息は不明である。

三代将軍家光は鎖国の完成（一六三九年）で、幕藩体制を確立する一方、島原の乱を経てキリシタン禁制を全国的に強化した。その弾圧は激烈を極め、(1)訴人報奨制、(2)踏み絵(3)五人組（キリシタン摘発を隣保組織の連帯責任として義務づける）の検索制度で、ほぼキリシタンの息の根をとめることに成功した。

そして、最後のとどめとして、類族を取り締まる「宗門改メ」が制定された。かくて、仙台領内に潜伏していた神父たち、すなわちフランシスコ会士フランシスコ・ガルベス、バラヤス、イエズス会士アダミ、日本人のマルチノ式見、ペトロ岐部らが次々捕縛され、江戸で殉教した。彼らは、転んだ神父ボルロや他の転びキリシタン訴人の白状によって逮捕されたのである。指導者を失ったが、未だ転宗しないキリシタンは、残酷非道な種々の拷問の末、やはり無残な種々の方法で殺された。そのため、評定所々定の刑場は勿論、領内の各地で、いわゆる所（ところ）成敗が行われ、おびただしい殉教者の血が流されたがその実数は明らかでない。米川、大籠地方における所成敗の地は、現在信者たちの崇敬の場となっている。

勿論、地下に潜伏したもの、転んだ者も少なからずあったと思われるが、いわゆるかくれキリシタンも歴史の流れの中で、正統信仰を失い、土俗宗教として現在に至っている。

このようにして、仙台領内キリシタンの若芽は摘み取られるに至った。

（完）

☆　二教会で宣教百年祭

十一月十五日（日）郡山教会において、二十三日（月）は一関教会においてそれぞれ宣教百年を祝う集いが開かれた。

郡山教会では、司教様が感謝のミサを司式し、信仰の先輩たちの遺徳を偲び、祝った。

一関教会では、ベトレヘム会の司祭および ゆかりの邦人司祭方が一堂に会し、梅津司教総代理を囲み感謝のミサを行った。

それぞれに百年の歴史の重さを受け止めつつ、今後の教会の発展を祈った。

尚、白河教会では、宣教七十五年のお祝いを十一月二十九日（日）に司教様をお招きして祝った。

正平協全国会議 仙台大会顛末記

仙台正平協会員　氏家　昭

10月9日～11日仙台聖ドミニコ学院を会場に、第13回カトリック正義と平和協議会全国会議が開催されました。180名の参加者は、全国会議始まって以来最高の人数だそうで、司祭、修道者、地元仙台教区の皆様も多数参加下さいました。三日間の会議を通して、正平協の存在とは何かを考えることができましたので皆様にご報告申し上げ、正平協に一層のご理解をお願い申し上げる次第でございます。

社会問題を通して信仰告白

まず始めに、カトリック教会内で社会問題を一般と取り組んでいるグループが、正平協の特性であるとの強い印象を受けました。

何故このように数多くの社会問題に関わっているのか、全国会議に参加して始めて解りました。会議参加者は今、自分が関心を持ち活動している問題について是非皆様に知ってもらいたいと強く思っているのです。問題意識を持った人々の集まりが、正平協の特色なのです。会議では、正平協活動を進めてゆく時に出会う、困難や障害について体験を話される方が多く、共通の問題点が浮彫りにされました。

活動を進めてゆく時、『壁』にぶつかっているのです。ある時は政治権力の強大さに、ある時は経済体制の矛盾に、ある時は人々の無関心などに会いながら働いている現実の姿は、信仰告白を毎日続けているのと同じではないでしょうか。主に倣って生きることを、主の弟子たらんとすることを正平協は目指しているのです。

信徒が広げる世界的な活動範囲

次に、正平協の活動範囲の広さに驚きました。地理的広さは正にグローバルなのです。カトリック教会は世界的教会とよく言われますが、正に世界中の問題を自分の問題としている事を実感させられました。会員の生活している地域の問題に始まり、日本国内、諸外国へと活動する地域が広がるのは、正平協の特性でもあるようです。私達信徒が果たすべき役割や、救援を必要とする人々のいかに多いかを、国内、国外を問わずに教えられることが多いのです。現代のような情報化社会では、国内問題は同時に国外問題となり、諸外国と連動する時代であるとの認識を持つ会員も少なくないのです。逆に、外国の人々の哲学、考え方が日本に及ぼす影響も大なるものがあり、政府間ベースに乗らない生の声を聞けるのも、正平協の面白い一面ではないでしょうか。人々の声なき声を聞く時、私達はそこに主の導きを感じるのです。

人が人を大切にする活動

続いて、正平協の活動とは何かということについて、感想を述べたいと思います。

正平協の活動は、政治活動でもありませんし、経済活動でもありません。純粋に、人が人を大切にする社会の建設を目指しています。この理念を社会の中で実現しようとする時、数多くの活動と運動が生まれるのです。やむにやまれずお手伝いをしたい、お役に立ちたい一心なのです。主のお手伝いをしたい、お役に立ちたいという気持ちが、活動の根源なのです。

死刑囚として死んだ主

最後に、今回の全国会議参加者が訴えたことで、私の印象深かった事を述べたいと思います。「死刑制度えん罪を問う」分科会の全体会議発表の時、浅間山荘事件で死刑判決を受けた永田洋子氏の弁護士が、「彼女が死刑執行前に洗礼を受けてくれるよう働いています」と話されました。私には良く解りませんでしたが、もう一人の参加者が「イエス様も死刑囚として死んで下さった」と話され、馬小屋で生まれ、死刑囚として死んだ主の生涯を考えた時、私の理解を超えた仕方で、今も主は働いておられると感じました。恵みとあわれみの主を、参加者一同分かち合うことができたのでした。

以上のように実り多い全国会議でありましたが、仙台教区の皆様のご支援とご協力により、無事終了することが出来ました事をご報告申し上げまして、御礼にかえさせていただきます。ありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊　＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【編集後記】シスター猪岡に心から感謝！

◆第一回のナイスが終了し、各教区で報告会が開かれていると思われます。仙台教区でもすでに始まりましたが、これからの教会の新しい一歩にしていきたいものです。（笹）